

日本と中国の歴史における儒教の影響

慶應義塾大学 総合政策学部 4年

上山信一研究会

田中祐作

【目次】

■序章：中国と日本の OS

…OS とは何か

…中国と日本の両国における OS

■1章：日本の構造

…土着の宗教：神道

…日本における儒教

…日本における仏教

■2章：儒教の変遷

…儒教の要素

…儒教の成立過程

■3章：儒教が歴史に与えた影響

…伝統的統治の限界

…日本における儒教利用と資本主義受容の過程

…神道と資本主義

…中国の儒教利用と共産主義受容の過程

…現代の中国共産党の儒教利用

■4章：まとめ

■おわりに

序章：中国と日本の OS

【OS とは何か】

社会を形成しより豊かな生活を送るために、人間は様々なものを生み出してきた。経済的な面を見れば、人間は、自給自足かつ定住した地域内での経済圏を形成した後、価値基準を規定し物々交換を行うようになった。そして、統一された価値基準をもつ貨幣を生み出したことにより、より広範囲に及ぶ経済圏を構築した。このように、人間は時代と共に創造性を発揮し、世界では複雑な変化が起こってきたのであるが、その変化の中でも変わらずにいるものがあり、当時の社会に加えて、後の世界にも大きな影響を及ぼしたものがある。その中で、無形かつ体系化されたものを、私たちは「思想」と呼ぶ。例えば、社会契約説と近代主権国家の関係も、思想が統治の形に影響を与えた1つの例である。16世紀から17世紀にかけてローマ・カトリック教会が巨大な権力を握っていたヨーロッパでは、マルティン・ルターによって宗教改革が行われ、権力を握ったが故に墮落してしまった教会と社会の強い結びつきが崩された。宗教改革を発端として、超自然的な論理を持つ神学的な支配とは異なる秩序のあり方を作り出すために、ホッブズやロック、ルソーといった思想家は人間が自由意志に則って社会契約を結び、国家に帰属したという社会契約説を提唱した。その結果、人間が権威を持つ近代的な主権国家の正当性が明らかになると共に、神的世界観が政治から切り離されたのである。

このように、人間は時代の流れに応じて思想を生み出し、その思想が国家や社会などに大きな影響を与えることによって、歴史が成り立ってきたのである。時代の変化に合わせて、その性質を変えながらも連綿と続き、社会の根幹にある思想のことを本論文では、OS（オペレーティング・システム）と呼ぶことにする。OSとは、コンピューターのシステムの管理を行うソフトウェアのことを指す言葉である。このOSに相当する思想こそが、1つの国家をコンピューターに例えた場合、国家というコンピューターを動かすOSなのだと考えてよいだろう。

【中国と日本の両国における OS】

本論文では、同じ東アジアの文化圏に属し、文化や経済、政治の面で歴史的に非常に繋がりが深かった日本と中国という2つの国家に注目し、その両国に

共通して文化の1つとして受け継がれている儒教が、両国を発展させてきたOSの1つであると考え。未来学者と称されるハーマン・カーンは『超大国日本の挑戦』において、日本を始めとする東アジアの国々の経済発展に注目し、その文化圏を「新儒教主義」の文化圏と呼び、東アジアに共通するものとしての儒教について触れている。また、経営学者のヘールト・ホーフステッドは、『多文化世界』の中において組織論の観点から、異なる文化圏に属する組織は異なった性質を持つことを指摘し、日本と中国という2カ国の傾向から、儒教が組織に影響を及ぼしていることを述べた。このように、東アジア地域における儒教の影響については、近年になって経営学の観点から指摘がなされているが、儒教の成り立ちから歴史を詳細に振り返り、それが現代にどのように影響を及ぼしているか、ということ論じたものはない。本論文は、儒教というOSが中国と日本の両国の発展にどのように影響を及ぼしてきたかの解説を行っていく。それを行っていく中で、特に注目するのが、加地伸行が著書『儒教とは何か』の中で提唱した、「礼教性」と「宗教性」という宗教が有する2つの特徴である。「礼教性」とは、社会規範や統合、倫理といった部分であり、「宗教性」とは、その宗教が誕生した段階から変わらない、先祖崇拜、1神教といったもののことを指す。

本論文を執筆する第1の目的は、儒教を中心とした宗教が、日本と中国という2つの国家に対して礼教性と宗教性の両面から影響を与えていることを解き明かし、2つの国家におけるOSの構造を明らかにしていくことである。しかし、時代が下っていく中で、儒教を利用した統治は行われなくなっていく。具体的には、日本においては明治時代以降、中国においては清王朝が終焉して以降である。この点において執筆の第2の目的は、日本では儒教に代わって資本主義を採用し、中国においては共産主義が採用された理由を解き明かしていくことである。また、第3の目的として、資本主義と共産主義というOSの利用に代わる、統治のあり方を考えてみたい。

第1章：日本の構造

歴史研究家である井沢元彦は、「仏教・儒教・神道集中講義」の中で、日本に「インストール」された宗教として、仏教、儒教、そして神道の3つを取り上げている。神道は日本に土着の、自然信仰を元にしたものであり、縄文時代に誕生したとされている。また、儒教は正確な伝来時期は不明であるが、6世紀初頭には百済の五経博士という儒教を伝道する役割の者によって、伝来したと考えられている。その後、仏教が6世紀ほどに百済の王から伝えられた。神道と儒教、そして仏教はそのどれもが長い歴史を持ち、土地を購入した際には神道的な地鎮祭を行い、多くの現代の日本人は人が亡くなれば仏教的な葬式を行い、寺院に付属している墓に入るなど現代にも大きな影響を及ぼしている。こういった点において、儒教、神道、仏教の3つは、日本人の思想を形成する上で非常に大きな役割を果たした、日本のOSと考えてよいだろう。また、3つのOSは浸透した時期が異なるために、与えた本項では、これら3つのOSがどのような順で受容されていったのかを述べ、日本におけるOSの構造を明らかにしていく。

【土着の宗教：神道】

日本において、まず成立した宗教は神道である。神道の特徴は3つある。1つは、「自然信仰」ということである。そのため、キリスト教のように開祖が存在せず、共同体の中から誕生した自然への畏怖から発展し、神道が誕生したと考えられている。日本は四季を持ち、南北に長く伸びる国土のため温帯から亜寒帯までの気候帯が存在する。さらに、国土における森林の割合は60%以上と、日本人は非常に多くの自然と接しながら暮らしていた。自然に囲まれて生活を送る中で、飢饉や干ばつ、土砂災害などの自然の厳しさにも当然触れるようになるが、その厳しい自然の中で人間としての文化的な生活を送るために、日本人は自然との調和を図るようになっていったのである。そのような暮らしを送る中から、自然に対して神的な要素を見つけ出し、それを信仰の対象とするようになっていった。江戸時代の国学者、本居宣長は神の定義を以下のようにしている。

「何にまれ世の尋常ならずすぐれたる特のありてかしこきもの」
(井沢元彦「仏教・神道・儒教集中講座」108ページより)

本居は、神を「世の中では通常見ることができず、異常な特質を持っているもの」としており、これは人間が予測できない、自然が引き起こす現象にも当てはまる定義である。「自然が引き起こす現象＝神」だとすれば、当然「神」の中には人間に対して都合の良い行為をしてくれるものもいれば、悪い影響を与える神もいる。善神は豊穡を人間にもたらし、悪神は飢饉や災害を起こす。日本人は予測できず、対応もできない神を、「祭る」ことで諫め、御利益を引き出してきた。¹自分たちに悪影響を及ぼす悪神でさえも祭り、たたえることによって、善神として転化し、御利益を得ることができる、と日本人は考えるのである。そして、神を祭る際は、その神がいる土地に暮らす人間が最も適役である、とされている。神が自然現象という形をとって、人間に影響を及ぼすのであれば、その自然現象に関係する人間、つまり自然現象が発生する土地に暮らす人間が、最もその「神」と近い人間だからその人間が神を祭るべきだ、という考え方が日本には存在する。

神道の2つ目の特徴は「多神教」の宗教である。土地や地方に合わせて神が存在するのであれば、日本には多種多様な神が存在することになる。前述した通り、自然を神だとする「自然神」、狐やへびなどが神となった「動物神」など、様々な類型がある。その中で、最も信仰の対象となりやすかったのが自然神であることは、先ほど述べてきた。日本人は、自然神が宿るような場所、神秘的なものを感じる場所のことを「神奈備」「産土」と呼んでいた。このような場所に、注連縄や榊を置き、神が宿る場所として「社」を設けたことが、日本全国各地に存在する神社の元となった。編集家の松岡正剛は、『日本という方法』において、社という言葉が「屋代」という言葉が元となって成立しており、神が宿る社は、「神の代わりを担うもの」としての機能があった。²この点において、神は社に常時在住しているという訳ではない、ということが分かる。日本人は、普段は実体を感じるできない神を祭り、招くことによって神からの御利益を得ようとしたのである。ここで注意すべきは、本来の神道における神々は人格を持たない、という点である。後の時代になって生前類い希な行いをした人間が死後に神となった「人神」などといった人格を持つ神が存在するようになるが、本来の神々は人間の前にごく希に現れ、靈験をもたらしていくような

¹ 井沢元彦「仏教・神道・儒教集中講座」（徳間文庫,2007）108 ページ

² 松岡正剛「日本という方法」（日本放送出版協会,2006）75 ページ

存在であったのである。そして、逆説的ではあるが、神を信仰することによって、その神が属する土地に住む人間は、非血縁的な地縁共同体として、強固な関係性で結ばれることとなる。³

そして、3つ目の特徴が、「先祖崇拜」である。日本最古の古典である『古事記』の序文には、「陰陽ここにかけて二霊群品の祖と為れり」⁴との記述がある。この文における「二霊」とは、イザナギとイザナミのことを指し、この2つの神から群品、即ち日本の国土や神々、人間を含む生物などの様々なものが生まれたとされているのである。この『古事記』の論理に従えば、日本の国土に属するものはイザナギとイザナミと深く密接な関係で結ばれていることになり、日本人は神々の子孫であることになる。この、神道独自の考え方によって、日本人の間には神々から連綿と続く血筋を絶やすべきではない、という意識が生まれ、自分よりも血統上では神々に近い、先祖への崇拜が行われるようになっていったと推測できる。

このように、日本において神道は、日本の地形や気候から生まれた「土着の神々への信仰」と強固な地縁共同体を形成することに貢献した「多神教」、そして神々と日本人の繋がりを証明した「先祖崇拜」という以上3つの特徴から、日本における3つのOSの「宗教性」の部分を担当していると考えられる。宗教性とは、民衆からの敬虔な信仰を集める要因のことを指し、⁵日本人の精神的なバックボーンとなっている部分のことである。それに加え、後に伝来した仏教と儒教が組み合わさり、日本の思想構造が形成されていった。次は、仏教と儒教がそれにどのように影響を及ぼしているのかを検証していく。

【日本における儒教】

まずは、儒教について述べていく。儒教は中国にて誕生した後、周辺地域に広まっていった結果、儒教の経典「五経」を伝道する役割の「五経博士」が513年に、飛鳥時代の日本に百済から訪れたことによって、日本に儒教が伝来したと言われている。

³ 宮本常一「忘れられた日本人」(岩波文庫,1984) 54 ページ

⁴ 次田真幸「古事記(上)」(講談社学術文庫,1977) 17 ページ

⁵ 加地伸行「儒教とは何か」(中公新書,1990) 25 ページ

日本において儒教が与えた影響は2つあると考えられる。1つは、「天人相関説」である。天人相関説とは、儒教の教義の1つであり、最高神「天」と人間に密接に関係がある、とするものである。例えば、天から天命を与えられて、人は「天子」として「天下」を統治する。天命を与えられる者は、徳を積んだ者であり、その徳を天に評価されて天子となる。天子となっても、徳を積むために民や国にとっての善政を行うことが規範とされていた。また、徳は家系によって子孫に継承されていくものであり、その家系の徳が無くなれば、新しい天子が天によって任命されるのである。中国においては、王朝の移り変わりはこの天人相関説と結びつけて考えられ、1つの王朝が滅び、新たな王朝が天下を取ったとき、滅んだ原因は天子である皇帝が悪政を行い、徳を無くしたことだとされる。また、悪政で民衆を苦しめ世の中を悪化させていく王朝を滅ぼし、天下を取る者に対しては、その行為は天によって任命されたためだとされ、正当化されるようになっていた。

一方、日本においてこの天人相関説は、天皇制を正当化する論理として使用されていた。天皇は、万世一系の存在であり、前述した『古事記』の記述から分かるように、万物を生み出したイザナギ、イザナミ両神から誕生した太陽神天照大神の直系の子孫とされている。そして、鎌倉時代以降、天皇は権力の実体から離れた部分に位置づけられ、「日本人の精神的支柱」として機能していたと考えられる。この点において、日本においては「権力者＝天子」という構造は機能せず、天皇が天子の役割を果たしていると言えるのではないだろうか。中国では、天子は「天からその徳を承認され、天子となる」というプロセスを経るのに対し、日本では、天皇に祖神との連綿とした繋がりがあり、天皇を神として捉えることもできるため、神々から承認を受ける必要がない。そして、天皇は権力の実体から離れた部分に位置づけられているために徳を無くすこと機会は少なくなる。このことから、日本においては儒教を受容することは天皇制の維持に繋がっていたと考えられるのである。

もう1つの儒教が日本に及ぼした影響は、儒教の徳目の1つ「忠」に関するものである。中国における儒教では、最も重視されるべき徳目は他者に対する愛を表す「仁」であった。仁のある人物が理想とされ、そこに近づくために守る徳として、「孝」と「悌」があった。孝は親に対して愛情や尊敬の念を持っていることを指し、「悌」は兄弟に対して親愛、尊敬の念を持つことを指している。これを説いた孔子は、「修身齐家治国平天下」という考えの元、まず自分の身の

回りから徳を積んでいくことが、ひいては国家の安寧に繋がる、という意識を持っていた。そのため、孝と悌が重要だとされたのであるが、近世の日本においては、孝と悌よりも「忠」が重要だ、とされた。その背景は、社会階層としての「武士」が誕生したことと関係している。中世に武士という概念が誕生した際は、主君と武士との間柄は契約を結んで成り立っている主従関係であり、近世で「武士道」と称されたものとは異なっていた。近世になり、江戸時代に徳川幕府は儒教（朱子学）を正統な学問として採用し、家康のブレーンを努めていた儒学者の林羅山が「上下定文の理」という理論を提唱した。林は、著書『春鑑抄』の中でこう書き記している。

「天は尊く地は卑し、天は高く地は低し。上下差別あるごとく、人にも又君は尊く、臣は卑しきぞ」

（「日本思想大系.28」より）

これは、階層構造状になっている当時の社会を正統とし、人と人の間にも差があることを認める、ということの意味している。このような林の思想が徳川幕府の統治原理に影響を及ぼしていたことが言えるだろう。社会が階層構造になっていることを認めるということは、武士も1つの階層として確立するようになり、儒学が正統な学問とされたことによって、武士階級をその原理に基づいて説明するようになるのである。また、朱子学の思想が社会一般に浸透していき、日本古来のイエと呼ばれる血縁関係を越えた共同体意識と同調することによって、忠が孝や悌よりも尊重されるようになったと考えることができると考えられる。

以上のことから、日本において儒教は「礼教」の部分が尊重されてきたと言えるのではないだろうか。「礼教」とは、「社会規範や倫理道德」⁶を司るものである。日本人は、儒教を受容する際に、「天人相関説」と「忠」という2つの要素のみを取り入れた。これは、儒教の有する宗教性の部分が、日本においては神道によって既に担保されていたために、儒教を取り入れる際は、神道には存

⁶加地伸行「儒教とは何か」（中公新書,1990）25 ページ

在していなかった礼教の部分を取り入れようとした結果なのではないだろうか。礼教の部分をもとに儒教から取り入れることによって、天皇の神性と徳を維持して血なまぐさい権力の間から離れた場所で天下を庇護する役割として独立させ、国家の安寧を維持した。また、儒教の徳目の1つである忠を取り上げることで、神道的な地縁共同体の結びつきをさらに強めると同時に、新たに誕生した武士階級の論理を成立させて、イエへの帰属を促すことで社会をより上手く動かすことができたのではないだろうか。

【日本における仏教】

続いて、仏教について述べる。前述したように、日本においては土着の思想として神道に基づくものが存在していた。神道の特徴としては、「自然崇拝」「多神教」「先祖崇拝」という3つの特徴がある。仏教はこれらのうち、「多神教」という特徴を利用し、日本で受容されるようになる。仏教の日本への伝来は諸説あるが、百済の聖明王によって6世紀ほどに伝来したと考えられている。

仏教は、開祖である釈迦が元人間であるため人間に近い容姿を持つ存在であり、仏教徒はその偶像を崇拝する。飛鳥時代に仏教が伝来した後、仏教を信仰する蘇我氏と神道を信仰する物部氏の対立が起こり、蘇我氏が勝利した結果、仏教は日本全国に寺を建立し、広まることとなる。ここで注目すべきは、日本において神道と仏教の対立が発生しなかったことである。むしろ、神道における様々な神々と仏教の仏を同列に捉え、土着の神道信仰と仏教信仰が混合し、1つの信仰体系として統合された「神仏習合」が起こったのである。

その象徴的な事例が、飛鳥時代以降に各地に神社に付属して建立された寺院、神宮寺だろう。前述したように、元々神道の神々は土地によって規定され、その神を信仰する集団は強固な関係性で結ばれている。それに対して仏教は、信仰の対象や教義、戒律といったものは統一されており、ある種の普遍性がある。これは推測の域を出ないが、日本人は、仏が神道の神々とは異なる性質を持っていることを理解し、その異なる性質を利用して普遍的な神道の信仰体系を確立しようとしたのではないだろうか。おりしも、各地に神宮寺が建立された時期は、日本全国に天皇を中心とした中央政権による律令制が敷かれ、地方の統一された統治体制が整えられた時期と重なる部分がある。中央政権にとっては、全国統一の信仰体系を持つ仏教を各地の有力な神社に付属して建立することに

よって、各地域にあった土着の神と信仰体系を仏教の普遍性に取り込み、統治を容易にする意図があったと考えられる。また、地方を支配していた豪族たちは、共同体を取りまとめる首長から、共同体を所有し、その中の生産を管理・徴収して中央政権に納める、といったことを行う封建領主的な性質を強めていったために、中央政権と同様の意図があったと考えることができる。

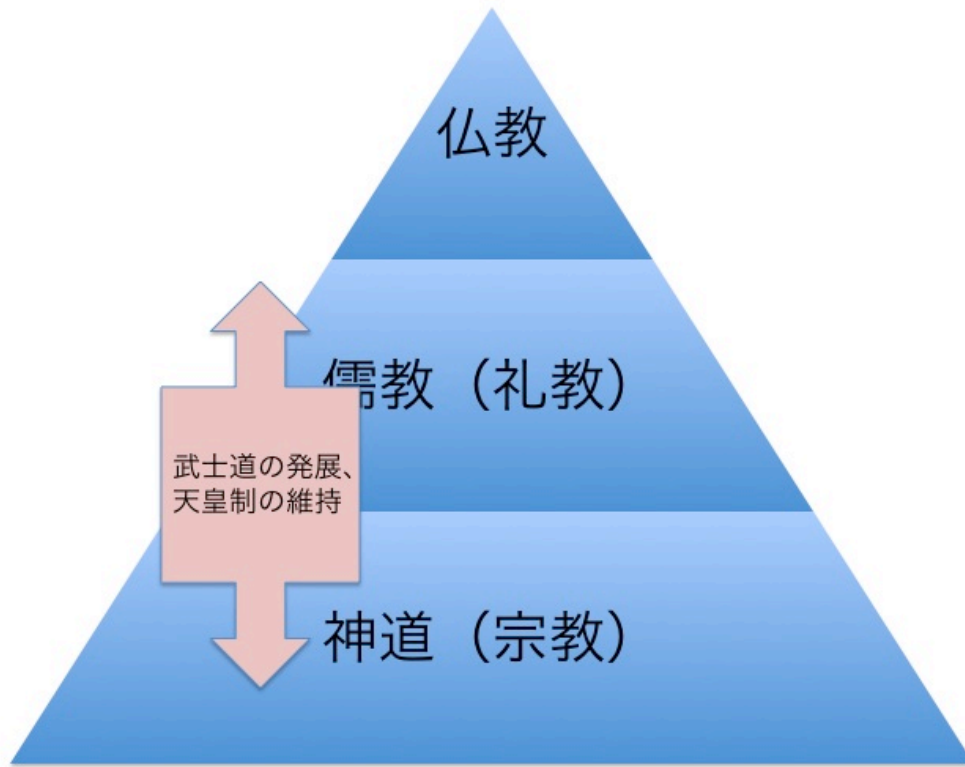
このような政治との結びつきは他にも見ることができる。平安時代、日本においては貴族が官僚の役割をある程度担っていた。中国においては、科挙に合格した官僚が政治の実務を行っていたが、日本にはそのような制度が無く、社会の階層がより高い貴族の中から序列を付けて、官僚に登用していたのである。その後、鎌倉時代以降は貴族から武士へと、権力の委譲が行われる。それまで武士は貴族に付き従い、戦闘を職業とする者という位置づけであったために、政治を行う際には足りないものが数多くあった。それを補う役割として、僧侶が政治のブレーンとして登用されていたのである。⁷

ここから分かるように、神道、儒教に続いて日本の OS となった仏教は、宗教と礼教の 2 つの部分が既に神道と儒教によってまかなわれていたため、地方をより上手く統治するような手段の 1 つとして、また教養の 1 種としての役割のみで使用されていたのである。ここまで、日本における神道、儒教、仏教という 3 つの OS の受容の過程、そしてその 3 つが日本という国家に及ぼしてきた影響を述べてきた。それをまとめると、

- ・ 神道：土着の「八百万の神々」に対する信仰と先祖崇拜の「宗教」
- ・ 儒教：天皇統治の正当性とイエに対する礼を担保した「礼教」
- ・ 仏教：教養と政治
- ・

ということになる。

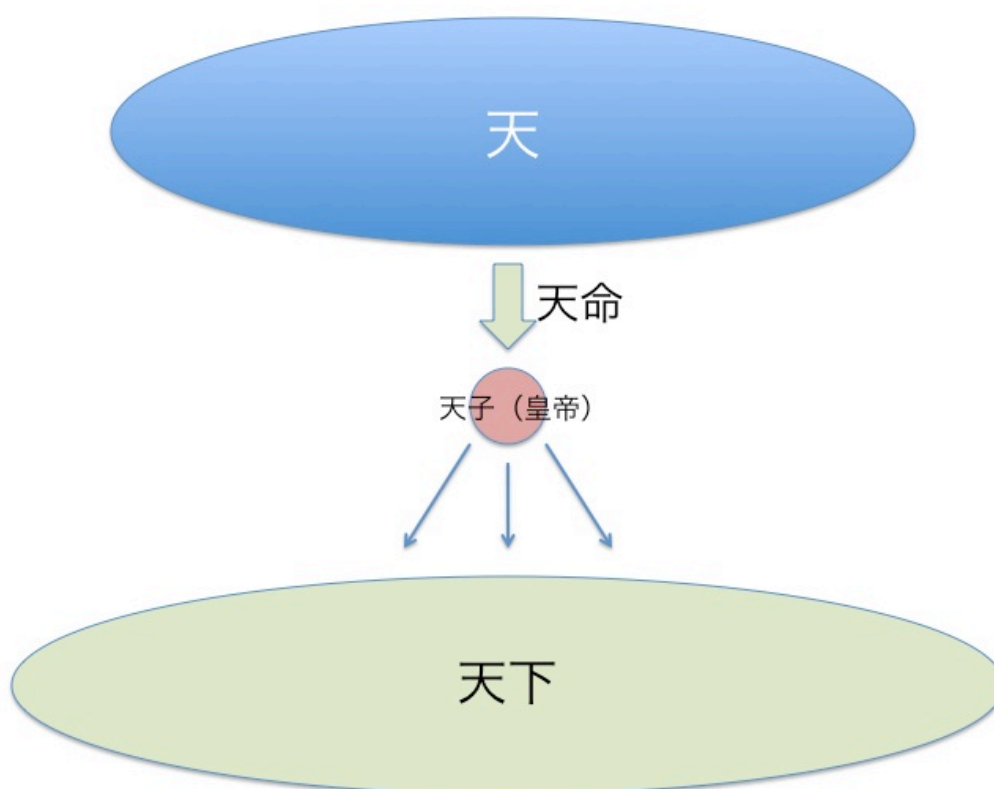
⁷井沢元彦「仏教・神道・儒教集中講座」（徳間文庫,2007）78 ページ



(図 1 : 日本における OS の発展系)

第2章：儒教の変遷

儒教を利用した統治を図示すると、以下のようになる。本項では、中国における儒教の概要とその成り立ち、そしてそれが後の統治構造にどのように影響を及ぼしてきたのかについて述べていく。本章では、中国の歴史の最初期の王朝である殷と周を取り上げ、その2つの王朝において「血縁関係への重要視」「神託政治からの脱却」という、儒教の特徴と共通することが行われていたことから、中国が王朝という文明を形成したときから、儒教が成立する要因があったことを明らかにしていく。



(図2：儒教統治の基本図形)

【儒教の要素】

儒教の開祖である孔子は、春秋時代の末期を過ごす中で、周王朝の権威が無くなり、都市国家の内乱が起こり、人々が絶えず戦乱に脅かされていることを鑑み、森によれば、その原因が「力による政治」にあることを発見した。力を

最上の原理とし、それを元に相手に勝とうとする世の中では弱肉強食の関係性のみしか生まれえない。そして、その関係性の中では絶えず争いが起こり続けることは明らかである。その関係性に終止符を打ち、現実の動乱の世の中を止めるためには、力による政治を否定し、「道徳による政治」が実行されるべきだ、とした。⁸そして、戦国時代が始まる以前の王朝、周をその理想的な国家とし、周に近づくために実行されるべき理想の道徳として提唱したものが、「仁」「孝」「悌」「礼」「忠」「義」「智」「信」という8つの項目である。それぞれの徳目の意味は以下のようなになる。

仁	他人に対する愛情、優しさ。儒教における最重要の徳
孝	親に対する愛情、尊敬。まず家庭の中で実践すべき徳
悌	姉妹兄弟に対する愛情、尊敬。孝と同じくまず家庭の中で実践すべき徳
礼	冠婚葬祭など、社会の中で行われる行事において守られるべき規範
忠	主君に対する真心、正直で裏表のないこと。
義	欲望を追い求めず、正しい行いをする事。
智	人や物事の善悪を判断できるだけの知恵。
信	他人との関係を裏切らず、誠実であること。

(齋藤 孝「現代語訳論語」を元に著者作成)

孔子は、道徳の基本を家族関係に求める。これは、今まで述べてきた中国独自の祖先信仰が関係していると考えられる。祖先信仰においては、8つの徳目のうちの「仁」「孝」「悌」が関係する。孔子はその著書である『論語』において、上記3つの徳目についてこう述べている。

年少者の心がけとしては、家の中では孝を尽くし、外では年長者に仕えて悌を尽くし、つつしみ深く、誠実であること。そして、世の中の人々を広く愛し、仁者に近づき親しむ。⁹

この文は、論語の冒頭に記されており、儒教の教えの中でも重要だと考えられ

⁸森三樹三郎「中国思想史(上)」(第三文明社,1978) 58 ページ

⁹ 齋藤 孝「現代語訳論語」(ちくま新書,2010) 14 ページ

ていたことが分かる。孔子は他者に対しての愛情である「仁」を最高の徳目であるとし、「仁」に付随する徳目として、家族に対する愛情である「孝」と「悌」がある。孔子は、古来より中国に存在した、血族関係と先祖崇拜の重要性を認識し、愛の及ぶ範囲を家族内から次第に拡大していき、最終的には「仁」という人類愛に到達させたのである。

「礼」「忠」「義」「智」「信」の5つの徳目に関しては、特に「礼」と「忠」の2つにおいて、社会との関係性が見受けられる。「礼」では冠婚葬祭など人間関係に関する社会規範を元としながら秩序を維持し、社会を安定させることへの意識があることが分かる。また主君に対して忠義を尽くす「忠」からは、下克上が相次いだ春秋時代の末期に対する危機意識から、「孝」や「悌」という家族に対する愛情の概念をさらに広げ、主君と自分の関係性を維持し、その関係性を規範としている様子が分かる。

このような、家族や親族から、愛の及ぶ範囲を広げ、社会の規範を維持する、という考え方は、

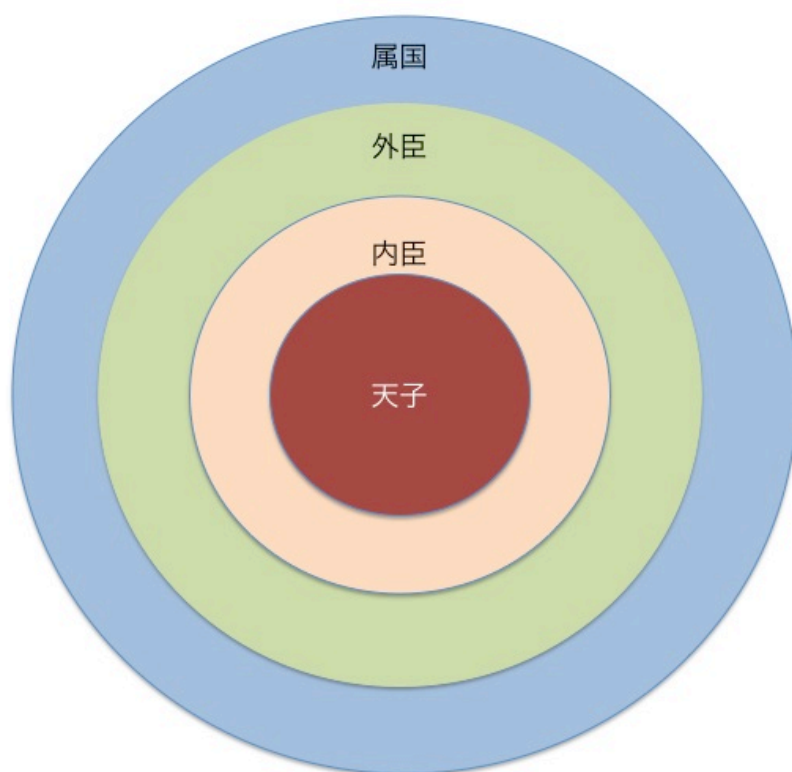
修身（自分を修める）→齐家（一族を斉える）→治国（国を治める）→平天下（天下を平定する）

という定式にまとめることができる。このようにして、「仁愛を中心として社会への儀礼を重視する」という儒学思想の基本が定まった。この儒学思想は後の中国の王朝、そして国家が統一されて以後、近代の中国にも大きな影響を及ぼしている。

例えば、「中華思想」もその1つだと考えられる。中華思想とは、中国が世界の中心であり、最も優れた国家である、とする思想である。天子である皇帝の住居に近い範囲から順に、「天子」→「内臣」→「外臣」と規定され、天子から遠くなればなるほど、その地域は「野蛮」とされ、「華夷秩序」によって成り立っている。¹⁰外臣のさらに外側には、皇帝に服従し朝貢を行うことで加護を得る属国が存在する。この思想は、徳を持った天子が天下を支配し、良い方向に導いていく。民衆は自らの身の回りから徳を積んでいき、天子の治める

¹⁰ 次ページ「華夷秩序」参照

天下と自己同一化することを目指していく、とする儒教の考え方に、異民族と接していく中で養われたナショナリズムが混合し、完成した思想だと思われる。儒教の教えの中で現れる「天下」という概念の中には、徳を積むことを目指して身の回りから善行を行う民衆がいる。しかし、その天下から外れた場所では、異なる言語を使い、衣服を身につける異民族がいる。また、そういった異民族が天下に対して攻め入ってくる機会は、中国の地理上多くあったと考えられるため、ナショナリズムが養われても不思議ではない。このような要素の上で成り立った思想が、中華思想であろう。そして、前述した中国の統治原理とこの華夷秩序が、中国の基礎を成していると考えられる。



(図 3 : 「華夷秩序」)

【儒教の成立過程】

次に、特徴的な統治原理を生み出した儒教が、どのように成立したのか、ということについて述べていく。中国王朝は、現在考古学的にその存在が確認されている最古の王朝、殷から始まる。殷は紀元前 17 世紀頃、契という人物が創建

したとされている。¹¹その後、紀元前 1550 年頃に聖王と称される湯王に率いられ、その本拠地を河南省内の黄河流域に移し、周辺国家を傘下に治め、発展していった。この中国最古の王朝である殷は、2つの大きな特徴を有している。¹²

第1の特徴は、「最高神の存在」である。殷においては、「帝」と呼ばれる神に対する信仰が存在した。帝は天の神であったとされており、人々は帝に2つの働きがあると考えていた。第1に、自然現象に対する働きである。農作物の出来高を左右する自然に対して、殷の人々は神的な力を見いだしたのである。発掘された甲骨からは、雨を降らせる力、日照りを下す力、風を起こす力、そしてその年の豊凶を左右する力が、天を司る神である帝にあると考えられていた。第2に、人事に関する働きである。殷の人々は、戦争において殷に与える助けや人間が起こす事故に影響を及ぼす力の存在を信じていたことが甲骨から明らかになっている。また、甲骨から帝に対する祭祀の印は発見されていないこと¹³から、帝の力は人間の力や考えが及ぶものではなく、ただ一方的に人間に対して自然現象や事故という形をとって働きかけられるものであると考えられていたのである。逆説的だが、帝は自然を含め世界を包括する巨大な存在として捉えられていたとすることができるのではないだろうか。森三樹三郎は、著書である『中国思想史』の文中にて、殷において祭られていた帝という存在に対し、「この帝を、後世でいう意味の天帝もしくは上帝に相当するものと見てよいかどうか、すこぶる疑問がある。むしろ部族の祖先神とみられる可能性のほうが強い。」(森,1978,p31)とし異論を申し立てているが、貝塚と伊藤が『古代中国』で明らかにしたように、殷において帝の文字が王に対して使用されるのは再後半の時代であるため、森の言う部族の祖先神として帝の概念が使用されたわけではなく、また、そもそも帝は自然に対する畏怖から生じた概念と考えられるため、殷における帝は、世界を包括する概念として使用されたと考えるのが自然ではないだろうか。

¹¹ 誕生年、始祖には諸説あるが、本論文では貝塚茂樹・伊藤道治『古代中国』の記述を参考にする。

¹² 貝塚茂樹,伊藤道治「古代中国」(講談社学術文庫,2000) 135-154 ページ

¹³ 貝塚茂樹,伊藤道治「古代中国」(講談社学術文庫,2000) 153 ページ

第2の特徴は、「神託」である。殷では亀の甲羅や牛や鹿などの骨を火で炙り、火の熱によってできるひび割れによって吉凶を判断するト占が行われていた。ト占を行う目的としては、第1に、軍事・指令であり、これから行う戦争の成否や他の国家に対する指令の正当性を占うものである。第2の目的とされるのが、狩猟・往来である。狩猟の可否や、狩猟を行っている間の安否を占うものだと言われる。その他にも、疾病生死、風雨、年ごとの作物が豊作か凶作か、といったことが占われていた。ト占の中でも最も重要な第3の目的として、祭祀がある。天候や山河などの自然神に対しての祭祀、そして帝をはじめとする、それら神々のもたらす災害の有無を知るためにト占が行われていた。第22代殷王武丁の執政下でト占に使用した骨に記された甲骨文字を見ると、先王の祖丁が王にたたりをしたかどうかを占った記述を発見することができる。¹⁴このことから分かることは、殷の人々は、自分たちの先祖が自分たちに災いを与えることがあると考えていた、ということである。この祖先に対する畏怖の念から、災いを与える祖先の靈魂をなだめて、その力を抑えようとする祖先祭祀が始まったと考えられる。しかし、第24代祖甲の時代から、次第に祖先に対する意識が変化してくる。¹⁵災いをもたらすものであるとされた祖先の靈魂は、子孫に対して佑を与える、より「親しみやすいもの」として祭祀の対象となってくるのである。そして、第29代帝乙、第30代帝辛といった殷王朝の最後半の王の時代になると、彼らは先祖である第24代祖甲を「帝甲」などと称して、前述した最高神「帝」の文字を使用するまでとなる。これは王家に特徴的なものであり、最高権力者である王は神に近い存在として自らを権威づけたことがわかる。

殷は、紀元前11世紀頃に、周王朝によって滅ぼされた。周王朝の特徴は、3つある。1つ目は、「諸侯との血縁関係を元にした国内のガバナンス」である。周は、成王の時代に成周と呼ばれる都を洛邑に建設し、その都を中心に各地域の勢力を「諸侯」として認め、各地域の実質的な統治を認めた。諸侯は、周王に対して農作物などの貢納や兵士や労働者を献上していたとされている。それ

¹⁴ 「貞う、これ祖丁が王にたたりせざるか」「貞う、齒を疾めり。これ父乙（小乙）がたたりせるか」貝塚茂樹、伊藤道治「古代中国」（講談社学術文庫,2000）148 ページ

¹⁵ 貝塚茂樹、伊藤道治「古代中国」（講談社学術文庫,2000）149 ページ

に対し、周王は、一定の領地を授けると共に爵位を与え、擬似的に、または実際に血縁関係を結び、諸侯を支配下に置いた。このようにして、血族を基盤とする安定的な政治体制を築いた周王朝は、500年以上の長期間に渡って政権を維持し続け、権威を保ち続けた。しかし、森が指摘するように、世代が移り変わると共に、血族の意識は希薄になっていく。¹⁶周王と諸侯との間の関係が徐々に希薄となり、従来の血の原理から力の原理が働くようになる。また、一国の内部でも、土地や財産を巡る奪い合いが行われるようになり、それを原因とする内乱も数多く発生していた。そして、各地の諸侯が反乱を起こし始めると周王朝の権威はなくなり、戦国時代へと時代が移り変わっていったのである。

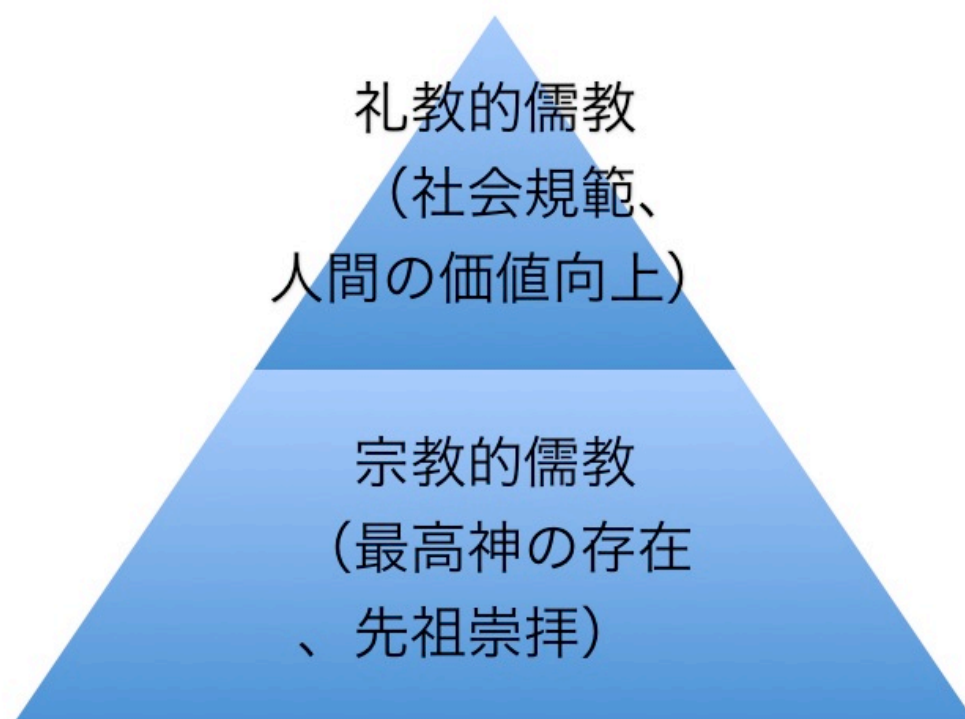
2つ目の特徴は、「最高神に対する人間の価値向上」である。殷において甲骨を利用した占卜の対象となり、信仰の対象となっていた帝という神は、周において「天」と称されるようになり、人々の信仰の形も変化した。当時の記録によると、殷から周に王朝が移り変わった理由として、第1に文王（周の開祖）が天命を受けたこと、第2に武王が殷との戦争を開始し、殷を滅ぼしたこと、という2つが記されている。¹⁷第1の理由においては、当時殷に使い地方を治めていた文王が高い徳を積んでいたため、天から暴君であった「殷の帝辛を打倒し、中国全体を治めよ」という天命を授かったとされている。このことから、人知の及ばない絶対的な神であった殷での帝から、文王が高い徳を積んだ優れた人間だと認識し、それに対して主体的に天命を授ける、人格を持った神へという変容が見られる。また、第2の理由に関しては、実際に殷と戦い、それを打ち破った武王の能力に関しても重視されているという点で、殷の時代に行われていた神の意向を問い、政治を行う神託政治からの脱却が起こり、神に対する人間の相対的な能力の向上、人間の高い能力への自覚が起こったのではないだろうか。

この、殷と周という2つの王朝において展開されたことは、最高神が存在しており、神託政治を行っていたという宗教性があったということ、そして当初は神託で政治が行われていたのに対して、時代を追うごとに人間の地位が神に

¹⁶ 森三樹三郎「中国思想史（上）」（第三文明社,1978）50ページ

¹⁷ 渡邊義浩「儒教と中国」（講談社,2010）28ページ

対して近づいていったということが、最高神の存在を認めながらも、人間が天下を統治する権利を付与されて実際の統治を行い、儒教の徳目という社会の規範を定義したという礼教性の成立に結びついている。ここから分かるように、中国においては儒教に宗教の部分と礼教の部分があり、その両面を上手く利用することによって、統治を行っていたと考えることができるのである。



(図 4 : 中国における OS としての儒教の発展系)

第 3 章 : 儒教が歴史に与えた影響

第 1 章では儒教、神道、仏教という 3 つの日本の OS について述べ、その成立の過程とそれが歴史にどのような影響を及ぼしたかを説明した。また、第 2 章では中国の OS である儒教が成立する過程と、歴史の中で儒教の統治原理がど

のように機能してきたかを明らかにしてきた。第1章と第2章で明らかにしたように、中国においては儒教が、日本においては神道と仏教、そして儒教がその統治の根幹を為す原理なのである。

しかし、時代が下るにつれて中国と日本の儒教を中心として設計された社会は限界を迎えることとなり、儒教を始めとした伝統的なOSに代わる統治のシステムとして、中国は共産主義を採用し、日本は資本主義を採用した。第3章では、中国と日本が伝統的に採用してきた、儒教と神道、そして仏教に加えて、両国が採用した資本主義と共産主義について述べていく。

【伝統的統治の限界】

本項では、日本と中国の伝統的統治が限界を迎えた理由について述べていく。まず、日本においては、儒教のより礼教的な要素である天人相関説と徳目の1つである忠が受容されてきたことは第1章において明らかにした。時代が下った後、天人相関説を唱える朱子学という儒教の類型の宗教を取り入れ、天皇から征夷大將軍という位を授けられることによって、自らの統治の正当性を確固たるものにしようとした。このような統治が行われていた江戸時代の末期に、西欧の列強国によって開国を迫る圧力があって、アメリカに対して日米和親条約を締結することを発端として、イギリスと日英和親条約、ロシアと日露和親条約を締結するなど、積極的な貿易を開始するなど開国を行った。この開国に対して世論の猛烈な反発を招いたことによって攘夷運動が巻き起こり、幕府が400年近くに渡って維持した儒教的な統治が、瓦解する要因となる。つまり、日本においては列強国からの外圧によって内部からの突き上げが起こることによって、礼教として儒教を利用して行っていた統治の体制が限界を迎えたと考えられる。

また、中国においては、最後の王朝である清において、少数民族の満州族が大多数を占める漢族を統治する際に、「満漢偶数官制」¹⁸や科挙を利用した儒教的な統治が行われていたが、イギリスとのアヘン戦争での敗北を発端として、欧米の列強国が干渉を強めてくることに対して国内の不満が爆発し、太平天国の乱や辛亥革命などの武装蜂起が起こり、清が倒された。この点において、王朝の儒教を利用した伝統的な統治が限界を迎えたと考えられる。

¹⁸ 官僚の人数が満州族と漢族で同数になるように定められた制度

両国は、以上で述べてきた儒教的統治の限界を乗り越えるために、別の OS を必要とし、探ってきた。そこで、日本において採用されたのが資本主義であり、中国においては共産主義が採用されたのである。

【日本における儒教利用と資本主義受容の過程】

日本における明治維新は、儒教における天下を治める者（天子）の徳が無くなれば、また別の者が天から天命を授かるという儒教の礼教的な部分の教えが受容されたことによって発生した問題である。逆説的ではあるが、このように儒教の礼教性に基づいて、統治体制の転覆が可能な状態であったからこそ、日本は旧態依然とした幕藩体制と崩し、民主主義を取り入れた近代的な国家へと舵を切ることができたと考えられる。つまり、儒教の礼教性のみを受容したからこそ、日本は近代化への道を辿ることができたのである。

次に、日本における、儒教と資本主義の関係性について述べていく。「世界システム論」を提唱するエマニュエル・ウォーラーステインは、資本主義を「無限の資本蓄積を優先するようなシステム」だと定義する。¹⁹この定義によれば、資本主義とは資本の拡充を最大の目的とする体制ということになる。欧米では、資本主義を取り入れることによって資本の拡充を狙い、科学技術も発達していった。それに伴って機械化が進み、産業における合理化が進行していった。また、それと同時に生産物の生産量が増大する、生産性の向上がもたらされた。生産性が向上し生産力が増していくと、人間の欲望と結びつき、より安価に大量に生産を行うための安く多い労働力と、生産物の輸出先を求めて自国内だけではなく国外にも産業を進出させていくことになる。江戸時代の末期に日本に欧米の各国が訪れたこともこの論理に基づいている。日本への欧米の進出に関しては、大量生産された生産物の輸出先として捉えられていたこと、そして捕鯨を日本の近海で行う際の物資の補給場所を確保したかったこと、というものが理由とされているのである。日本においては、江戸時代に鎖国を解いて以降、上記の論理に基づく欧米の国々と外交上対峙する中でその強大さを認識し、対抗していくために欧米の国々が取り入れていた資本主義を採用することとなった。

¹⁹ エマニュエル・ウォーラーステイン「入門・世界システム分析」（山下範久訳、藤原書店、2006）69 ページ

【神道と資本主義】

これに加え、日本は、資本主義を取り入れたことで資本主義と神道が結びつき、「国家神道の誕生」という大きな変化を起こすこととなる。強大な欧米の国々が資本主義やキリスト教といった異なる強力な OS を持って迫って来た際、日本はそれに対抗する形で国家神道を生み出した。日本という国家の「拠り所」となる存在は、天照大神からの万世一系とされていた天皇であったため、天皇を人間の姿をして現れた神、「現人神」とし、日本国民の安寧を祈るための宮中祭祀を定例化して権威付けを行った。そして、伊勢神宮を本宗として国家の機関と位置づけて日本全国の神社を国家の管理下とし、その神道ネットワークの頂点として、天皇を据えたのである。さらに、国民に対して国家神道の正統性を教えるために、1890年（明治23年）には教育勅語を發布して国家神道のイデオロギーを支える支柱とした。その後、国家神道は日本において発達した資本主義の拡張性と結びついて帝国主義をも肯定するようになり、神社祭式の制度化が進み、1つの町村に1つの神社のみを設置するという「神社合祀令」が行われ神社の統廃合を行って権威を高めることや、それまで尊重されていた神仏習合は禁止されて、神社の独立性が強調された。また、海外でも大東亜共栄圏の構築のためにアジアの各国に神社が建立されることとなる。国家神道は第2次世界大戦の日本の敗戦の後に、GHQによって廃止されたが、国家のために亡くなった人を神として祀る護国神社や靖国神社は、依然として多くの国民が訪れる場所となっている。

【中国の儒教利用と共産主義受容の過程】

次に、中国における儒教利用について述べる。殷や周において行われていた宗教的祭祀、自然信仰から誕生した儒教は、前漢の時代になってその形態を大きく変える。儒教は、周の時代において血縁関係に基づく中小の共同体を元に成立したことは、第2章において述べてきた。漢の時代になり、呉楚七国の乱や推恩の令の發布といった中小共同体が重要な社会構成者としての立場として明確なものとなり、中央政府や官僚の位置づけが完成されつつあった。²⁰そのような状況の中で、儒教はより統治を安定化させるために官僚組織の中に取り入れられ、「経学」という、儒教において重要視される経典を解釈する学問が生ま

²⁰ 加地伸行「儒教とは何か」（中公新書,1990）120 ページ

れ、教養として国家が尊重するようになる。ここにおいて、儒教の礼教的部分が体制イデオロギーとしての性格を強め、宗教的部分が中小共同体の中に生き続けるという、宗教性と礼教性の分離が起こり始めるのである。

続いて、資本主義に対するアンチテーゼとして誕生した共産主義について述べていく。資本主義は、前述したように資本の無限の拡充こそがその本質である。しかし、資本主義が進むことによって、資本を蓄積する側（ブルジョワジー）と搾取される側（プロレタリアート）という2つの社会階層が生まれるようになる。社会全体としては資本の拡充として捉えられるのであるが、その社会の内部では、大量の生産物を生み出す仕組みを作り、運用する側が、資本の蓄積と拡充を図るために、労働力として多くの人間を安い賃金で雇用し、この階層構造が成立する。この現象に対して警笛を鳴らしたカール・マルクスが提唱したシステムが共産主義である。マルクスが著書『共産党宣言』の中で提唱したこの概念を、実際に国家において実行したのがウラジーミル・レーニンである。レーニンは皇帝と貴族が支配するロシアにおいて共産主義革命を実行し、権力を奪取し、ソビエト連邦が建国されることとなる。ソビエト連邦においては、マルクスが主張した共産主義の国家を世界に増やしていく世界革命論が唱えられ、他国に共産主義を広める組織「コミンテルン」が設立された。

中国においては、1840年に起こったイギリスとのアヘン戦争に敗戦したことがきっかけとなり、清王朝は欧米の国々と外交を行っていく必要に迫られ、またその強大さを認識するようになった。国民の中でこれを認識していた者たちと、少数の満州族が大多数を占める漢族を支配するという清王朝のガバナンスに不満を持った者たちは、革命組織を各地で結成し、清王朝の打倒と共和制の採用をスローガンとして辛亥革命を起こした。その結果、各省は清王朝からの独立を宣言し清王朝は終焉を迎え、新たに共和制の中華民国という国家が誕生することとなった。中華民国の内部では統治体制が安定せず、孫文が1920年に中国国民党を結成、翌年1921年にはコミンテルンが提唱する世界革命に共鳴する形で、中国共産党が結成された。その後、国民党による一党独裁や日中戦争において日本に対峙する形で権力の基盤を安定させようとし、2つの党が共同して国共合作が行われるなど統治体制が模索されるが、第2次世界大戦終結後の1949年に、毛沢東ら共産党による中華人民共和国の建国が宣言され、現在に至る。共産主義を最高のイデオロギーと掲げる中華人民共和国の建国以後にも、1980年代以降には鄧小平の「改革開放」政策において資本主義を取り入れて経

済特区を設定するなど、柔軟に経済成長を目指す方向性を見せている。

【現代の中国共産党の儒教利用】

このような歴史の流れにおいて、近年、中国共産党は礼教的な、儒教思想を取り入れた政策を再度打ち出している。ここには、第2次世界大戦後の世界の秩序を資本主義と対立することによって維持していた共産主義というイデオロギーが、冷戦の終焉によって力を失ってしまったことが影響している。近年中国が打ち出している施策の1つと考えられるのが、「孔子学院」と呼ばれる公的な文化施設の建設である。孔子学院は、中国政府が海外の大学を始めとした教育期間に付属させる形で設置される、その国の若年層に中国語や中国の文化を理解してもらうための教育機関である。孔子学院を設置する目的は、中国に対する脅威論やチャイナリスク等に関する悲観論、中国の諸民族が独立し国家が分裂するという分裂論などの世論の発生を抑えることであるとされる。以上のような世論は、中国に対する正確な理解や認識が少ないことが原因であり、中国に対する正しい理解をその国の国民にしてもらうことで、良好な外交関係に繋げることが、中国にとって孔子学院設置の狙いだと考えられている。この政策を中国の統治原理から解釈すると、儒教とナショナリズムが混合して誕生した中華思想に影響を受けたものだと考えることができる。

中華思想においては、中国が強国になっていくにつれて、華夷秩序も同心円状にその面積を増加させていく。華夷秩序の面積が増すと、同心円の最も周縁に位置する属国は、中国の言語や文化、倫理を受け入れていくため、徐々に外臣・内臣と内部に取り込まれていくのである。孔子学院の設置は正に、華夷秩序の同心円を拡大するために外国に孔子学院を設置し、中国の秩序を受け入れる土壌を養っていると考えることができるのではないだろうか。

上記のことから、中国は様々な手法を用いて情報の統制を行っており、国内・国外から安定した統治を揺るがすことを避けるために、この点において、現代の中国政府は独自の社会規範を広げ、新しい華夷秩序を形成することによってその独自の統治を維持しようと努めていることがわかる。

第4章：まとめ

ここまで述べてきたことから、中国と日本の両国の歴史には儒教が強く関連していると考えられる。第1章では、日本において儒教がどのように受容されてきたのかを、既に土着の信仰として成立していた神道、儒教の後に受容された仏教という2つの信仰と合わせて検討し、日本においては儒教の持つ「天人相関説」と「忠」という2つの特徴を受容したことを明らかにした。それは、土着の神道において宗教の宗教性の部分が既に担保されていたため、儒教は礼教性の部分である天人相関説や忠を取り入れたのである。

また、第2章では、中国における儒教の成立の過程を殷と周という最初期の2つの国家の「最高神の存在」と「血縁関係に基づく共同体」という2つの特徴に関連していることを述べた。中国においては、血縁関係に基づく先祖崇拜が行われており、そこから共同体を重要視し、先祖から自分の子孫までの系譜を途切れないように力を注ぐ意識が生まれた。また、初期においては人間が抗うことができない自然に対する畏怖の念から、自然を包括した最高神の存在が認められた。しかし、時代が移り変わると共に、人間の力が上昇し、最高神から天下を統治する権利を付与され、統治を行うという論理が生まれた。この論理は社会一般に対する儒教の宗教性を失わせ、先祖崇拜などの宗教的な部分は、血縁関係にある中小の共同体の中において重要視されるようになっていった。また、より国家が組織化されたものになるにつれて、礼教の部分が強まっていった。

そして、第3章においては、日本と中国の両国において、儒教が歴史的に与えてきた影響と、儒教を利用した統治が限界を迎えたことによって、日本においては資本主義を、中国においては共産主義を儒教に代わり得るOSとして採用した理由を解き明かしてきた。日本においては江戸時代に朱子学を国学としたことによって、明治維新が勃発して近代化が進行したことを述べ、明治以降に西欧の列強国と外交を行う中で資本主義と国家神道の結びつきが強まったことを明らかにした。また、中国においては漢の時代に、中央の官僚組織化が進行することで儒教の宗教性と礼教性が分離したことを指摘し、それが共産主義国家となった現在の中国の外交政策にも影響を及ぼしていることを明らかにした。

以上、ここまで述べてきたことによって、なぜ儒教を利用した統治が行われな

くなり、資本主義と共産主義がそれに代わる OS として採用されたのか、ということを知り明かしてきた。つまり、礼教の部分を担当する儒教が限界を迎えたことによって、それに代わる礼教性を担保するものとして、資本主義と共産主義が採用されたのである。しかしながら時代が下り、冷戦という対立構造が終わった後、無限の資本蓄積を行うシステムである資本主義においては金融市場に対する統制が効かなくなり、金融危機が引き起こされるなど、限界を迎えている状況だと考えてよいだろう。ここにおいて、中国が行っている文化政策の一部としての、孔子学院の各国での設置は、新しい華夷秩序の形成に繋がり得る施策であると考えることができ、1 度限界を迎えた礼教としての儒教を再度取り入れようとしていると解釈できるのではないだろうか。

おわりに

本論文は、研究会で輪読を行った内容の 1 つを掘り下げたものである。執筆するしかし、第 3 の目的である、資本主義と共産主義という OS の利用に代わる統治のあり方に関しては、中国の孔子学院の設置という文化政策を取り上げるのみに終わってしまったが、第 1 の目的である礼教性と宗教性という 2 つの面からの儒教の受容の構造、第 2 の目的である、儒教を利用した統治が限界を迎えた理由に関しては、一定の知見を提供できたのではないかと考えている。

本論文を制作するにあたり、まず指導教官である上山信一総合政策学部教授には丁寧なご指導をして頂いたことに対し、御礼を申し上げたい。上山教授には毎回の研究会でのコメントや議論、授業に対する向き合い方など、参考にさせて頂くことが数多くあった。また、2 年時より研究会に所属し、討論型世論調査プロジェクトの一員としてお世話になっている曾根泰教教授に対しても、この場を借りて御礼を申し上げたいと思う。そして、2 年間に渡って切磋琢磨することができた上山研究会と曾根研究会の学生を始め、SFC 在学中に出会った全ての方々に、感謝の意を評したい。

参考文献

- 「古代中国」 貝塚茂樹,伊藤道治
「中国化する日本」 與那覇 潤
「日本政治思想史」 渡辺 浩
「シリーズ中国近現代史 1~4」
「中国経済史入門」 久保 亨
「街場の中国論」 内田 樹
「中国思想史」 森 三樹三郎
「老子・莊子」 森 三樹三郎
「三民主義」 孫文
「古事記（上）（下）」 次田 真幸
「図解 「東洋哲学」 は図で考えるととっても面白い」 白鳥春彦
「忘れられた日本人」 宮本 常一
「日本という方法」 松岡 正剛
「東洋文化史」 内藤 湖南
「昭和史」 半藤 一利
「昭和史 戦後編」 半藤 一利
「現代中国の政治」 唐 亮
「大衆の反逆」 オルテガ・イ・ガセット
「暴走する資本主義」 ロバート.B.ライシュ
「入門・世界システム分析」 イマニュエル・ウォーラーステイン
「強国論」 デビッド.S.ランデス
「国家はなぜ衰退するのか」（上下）ダロン.アセモグル,ジェイムズ.A.ロビンソン